
魔法少女リリカルなのは～はじまりの龍～

伊吹山 萃香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのははじまりの龍

【Nコード】

N9481W

【作者名】

伊吹山 萃香

【あらすじ】

古の時代…

ベルカの時代より遙かに昔…一つの魔法文化が有った。始まり龍が伝え、人々が其れを『魔法』に昇華させた。

その魔法文化は今あるミッド式、ベルカ式の元になった…とも言われている。

その名も…『ドラゴ式』

始まりの龍達の力借り、その力の一端使う魔法。

その龍を身に宿した人間…

アクセル・ストライク。

このもの語り主人公である

始まり

この物語は原作崩壊があります。まあ二次なのでそこら辺は悪しからずご了承くださいませ。
ついでに作者初作品な為かなりグダグダ感有ったり無かったりします。

古の時代：

ベルカの時代より遙かに昔：一つの魔法文化が有った。

始まり龍が伝え、人々が其れを『魔法』に昇華させた。

その魔法文化は今あるミッド式、ベルカ式の元になった：とも言われている。

その名も…『ドラゴ式』

始まりの龍達の力借り、その力の一端使う魔法。

その龍を身に宿した人間：

アクセル・ストライク。

このもの語り主人公である

主人公紹介（前書き）

とりあえず主人公紹介だよ

主人公紹介

萃香だよ!!

アクセル

「どうも主人公です」

さてさて主人公の紹介なんだけど…

何かグダグダだよ

アクセル

「マジですか…」

と、とりあえずどうぞ

名前

アクセル・ストライク・八神

年齢

約六千歳以上

魔力

SSランク

デバイス

??????

性別

男性（そんな馬鹿な？）

能力

魔力変換 重力

ドラゴン・インストール
龍神導入

容姿

シグナムとリインフォースを足して二で割った容姿で、身長はバイスぐらいの高さである。

昔は白髪紅目であるが、今現在は（はやてが生まれた時から）茶色で髪をポニーテールにしている。その為初対面には女性に間違われがちである…本人は気にしていない。

性格

基本的優しい。家族を第一に考える、家族であるはやての負担を少なくするために、自分少し殺している。

少し過保護で有るため後にヴォルケン達に戦いだけじゃない生き方を教える。しかし、敵に対して一切の妥協を許さない。敵を殺す事に躊躇しない情けを掛けない。

その他参考資料

家事は全般こなし、料理も作れる。

交友関係も広く、管理局に自分の教え子何名か居る…昔管理局に勤めていたらしい。

主人公紹介（後書き）

グダグダですいません

日常だよ（前書き）

萃香だよ

グダグダ感MAXな内容だから期待しないでね

後主人公の言葉使いがまだちゃんと固定してません。

それではスタートだよ

日常だよ

現在時刻6時半。

「~~~~」

皆さんおはようございます。アクセルだ。俺は今朝食作りの最中だ。え？誰の朝食かって？俺とはやての分を作ってたよ。

「ふう - ふう…ん」

全く…髪が長いと毎度毎度、髪をかきあげ無いと味見出来ないとは不便だなあ…。

でも…はやてはこの髪好きだって言ってたし…まあ良いかな？。

「…OKかな？」

味噌汁は大体大丈夫だろう、はやては料理好きだから大変だ。まあ…俺も美味しいモノを食べさせたいし頑張るか。

「今日…半熟で良いかな？いやいや…ん〜」

半熟かあ…嫌いじゃ無いんだけど、俺固い方が好きなんだよね…皿汚れないし。でもなあ…はやて半熟好き…。

「よし…半熟で良いか…おっと…早く作らないと駄目だな」

危ない危ない、はやてがお腹空いて起きて来ちゃうじゃないか、そ

れに今日もやることが沢山あるしな。

「はやてを起こさないとダメだし、天気がいいから洗濯も後…」

ダメ考えただけでもかなりある…天気のこと考えるとシーツ干さなきゃいけないし、普通の洗濯物ある…後病院行って話聞いて…。

「ふう…今日も多いなあ、楽しく一日頑張ろう」

まあ確かに多いけど…はやての負担が消えるなら、其れだけで十分だな。

「…よし完成だな。後ははやてを起こさないと…うちの妹様はまだ寝てるのか？」

だからアレほど言ったのに夜更かしはダメだって…。

「ほらはやて起きて、はやて早く起きて」

案の定、うち娘は爆睡だよ。さつきから五分ぐらい揺すってるけど…台詞が一緒なんだけど。

「後…後五分…」

「ごめんはやて…もうさつきから何回も聞いたよ。

「はやて起きてご飯が冷めちゃうよ？好きな半熟だよ？」

何時もならこの辺で起きてくれるんだけど…。

「ん〜…後一時間やなあ…」

この娘はなに寝ぼけたこと言ってるんだ？

後…一時は流石に寝過ぎだ。

「好い加減…起きろ!!」

ふふ…布団を奪ってしまえばコッチのものだ。

さあ観念して起きなさい!。

「うう…寒い…」

強情な娘だなあ…布団無いからって、もぞもぞして…可愛いなあ…。
でも…はやくも成長したなあ…昔はあんなに小さかったのに。

「昔は…一人で寝れないって言ったのにね」

そうそう…俺が用事で夜居ないって言ったら泣いちゃうし。
でも甘えん坊な所は変わらないかな？

「本当はね…学校に行って友達を沢山、沢山作ってほしいんだけど…」

おっ?…やっと起きるかな？

「寒!?!…何でこない寒い…って布団がない!!」

「おはようはやて」

「え…兄々？おはよう」

「はいおはよう」

ふふふ…やつと起きてくれたよ、ふう…さあご飯食べなきゃね。

はやてはまだ脳が覚醒してないのかな？俺が笑顔でおはようって言ったら「その笑顔は反則」って言ったり「男なのに女みたいやし…でも格好いいし」とかブツブツ、確かに女顔だけど俺の笑顔は反則でも、何でもないような気がするんだけど？

「兄々…？どないしたん？」

「ああ…ではご一緒に」

「いただきます」

「ん〜…兄々このお味噌汁美味しいなあ、また腕上げたんか？。あつ！目玉焼き半熟や！？良いやぁ嬉しいわぁ」

本当にはやては表情コロコロ変わるね、毎日見てるのに新鮮だなあ…。

「ん何や兄々？うちの顔何か付いてるか？」

「ん…ああ何で無いよ、本当に美味しそうに食べるなあ…と思って

「いやいや兄々、「美味しそう」「やのうて」「美味しい」ねん」

そんな満面の笑みで言わないでくれよう、恥ずかしいだらる全くはや
ていつ《イ … マイ・ゴット？》も？

「起きたのかい？“ヴァイサーガ”？」

「御はよう御座います、我が神よ、はやてお嬢様」

「あっサーガさん、おはよう御座います」

「はやてお嬢様は今日もお綺麗で何よりです」

「いややわ、全く口がうまいなあサーガさんは」

何処の街角のイドバタ会議の会話だよ。

この声の主はけして幻聴でも心の声でも無い、俺のデバイスの声だ。
こんな中途半端な、時間帯に起きる珍しいデバイスだ。

昔ははやてには『魔法』の事は秘密にしてただけど…見事にバレ
た。

「はあ」

「兄々？どないしたん？溜め息ついて？幸せが逃げるで？」

「そうですねよ神よ、幸せが逃げてしまいますよ？大体神よ、溜め息
などついて。何かご不満な点でも？」

「いやいや不満は無いけどね、只さあ…」。

「何でバレたかなあ…って今更考えただけだよ」

「んなもん簡単や」

「へきゅ？」

何が簡単だつて？

「こちらは“家族”なんやから、わかつて当然よ」

「はやて…」

本当にこの娘は…、毎度優しい言葉くれるね。

「ほ、ほら無駄話はこの辺で、さっさとご飯済ませなさい」

「はい」

《ゴット…ゴット…》

《何だい？》

《私も神の家族で在れる要に頑張ります》

全く俺の周りには良い心の持ち主が多いみたいだな。さて今日も楽しくいきますか。

日常だよ（後書き）

萃香だよ

ん、とりあえず…何之？的な話だけど気にしないで、今回のお後だよ。

・主人公はポニテ

・はやては魔法を知っている！？

・デバイスはリアル系

…みたいな感じの内容だったね。
うん、わかんねえよ

とりあえず次回も読んでみてください。

害虫駆除（前書き）

萃香だよ！！

投稿かなり遅なっただけど…ごめんなさい。

今回のお話は主人公の裏の顔的な内容だよ。

相変わらずグダグダ& a m p ;無才能がMAXだけど気にしないで
ね？。

害虫駆除

此処は第57管理外世界『レザリア』。

この世界の特徴は、一年中気候が朝は温暖且つ乾燥が凄まじい世界で、逆夜は急激に温度が低下する。

しかも近年此処もこの気候により、『無人世界』に変わった。

其れにより今は違法犯罪の拠点になっている。主に、何等かの人体精製 or 人体実験であると推測される。

しかし、管理局に未だにバレていない。

此処で管理局の汚点をあげよう。

まず一つ、管理局は其の数多の、其れこそ無限な世界を管理しようと、日夜目を光らせている訳だが…人手が足りない。

文字通り、人手不足な訳である。その為犯罪を防ぐ、魔導師が少なく且つ育成不足である。

二つ目、上記話したとおり、目を光らせている訳だが、揉み消されるケースが少なくない 否断然多いだろう。

管理局の上層部は自分達の私利私欲の為、日夜犯罪に関与している。しかも、管理局員の大半がまさか自分達の上が、そんな事無いと信じ切っている訳だ。

今回此処行われているのは、実験は上層部絡みか違うのか…。

「そんな事…俺はどうでも良いがな」

夜空を背に研究所と思われる建造物を眼下にそう呟いた。

とても…とても綺麗な声だった。凜として透き通る、まるで歌声のようだけれど…怒気が含まれていた。

其の姿は、全身を漆黒の騎士甲冑に身を隠し、背に之又漆黒のマント。腰には、西洋剣を携えている。

「我が神よ…基地内に生態反応あり、敵兵力を確認致しました」

「数は？」

「魔力反応68…地下に11…魔力ランクB22、A3、AA2…残りはC以下です」

AAと言えば管理局でも少ない魔力ランクだ。敵がコレほど戦力が有るとは予想外だ。

「まあ…我が神なら何一つ問題有りませんね、むしろ物足りないくらいですね」

「…取り敢えず…殲滅開始だ」

「yes my god」

一方、其の研究所では…。

「素晴らしい…素晴らしいじゃないか!？」

「全くですね!博士!」

「ん〜 素材との相性及び拒絶反応…ともに基準値」

何人もの学者達は、様々モニターのデータを見ながら、まるで子供のように喜んでいる。

しかし、モニターに映っている物はそんな生易しい者でなかった。

年もまだ幼い少年少女が個室に別れていて、身体を拘束され様々ケールやチューブ…明らかに普通じゃない。

「あ…あああああああああああああ!!!」

その中一つから叫びが上がる。

「ああ…勿体無いなあ、折角力を上げたのに」

「仕方ないですよ、この素材は魔力も低いし、身体に異常が有りましたし…まあ、我々に貴重なデータを提供してくれたし…良かったんじゃないですか?」

「『廃棄』ですかねえ?くつくくく」

「おやおや、貴方も好き者ですねえ?」

「いやいや、皆さんも同じ穴の住人でしょう?」

「違いますねえ」

「ハッハハハ!」

狂ってる…その一言で全てが片付いてしまつ。

其の刹那。

ドオツゴオオオオン。

爆発音共に振動。

「何事だ!? 一体何が起きた!？」

「上空より魔力反応確認!…S+クラス砲撃!? もう一発来ます!

」!

「直ちに迎撃させる!」

再び上空より。

「…出て来るかな?」

「恐らくは…来ました」

彼を囲うように十数人の魔導師が陣形を組んでいる。

「テムエ…何者だ？」

「……………」

「答えやがれ！！」

「其れとも…俺等にビビって声も出ないってか？」

「「ギャハハハハ！！」」

「全く…ゴミ虫風情が…」

一瞬。

まさに一瞬で空気が凍てついた。

言葉を発した途端に、途轍もない殺気が彼等を襲った。彼等は息を行つ事さえ忘れ、冷や汗を流し震え…恐怖した。

「貴様達の用な害虫風情が、俺に話し掛けるな。不愉快だ」

その途端、彼は移動し始めた。彼等の脇を抜けようとした。

だか　次の瞬間。

「な、嘗めるなあ！？」

敵の内、剣型のアームデバイスを持った一人が、背後から斬り掛かった。

「…愚かだ」

ヒュン。

短い風斬り音だった。

二人の動きが止まった。
そして…

「あ…れ…?」

世界がぐるりと傾き始めた。

ブツシャアアアア。

血がまるで噴水の水の出で出てきた。

切りかかった彼は何時の間にも『自分の首が切り落とされた』と気付くのか。

「う、うわぁぁぁ!?!」

「お見事です我が神よ」

「ああ…お、思い出した!?!」

「どっした!?!」

「此奴の正体だ!?!此奴、…コイツは、コイツの名は『闇の救世主』」

「!?!」

「はあはあ…ああ…明らかにオーバーキルだぜ。之で生きてたら…」
撃った人間も吃驚するぐらい『殺した』。

「知るか…相手はメシア、念入りに殺さない」と

「まあ…お偉さん方の研究事情だったし、良いんじゃないか?」

彼等は何を隠そう、管理局員…。

まあ元ではあるが…其れでも上層部の汚れに関与している、結局ゴ
ミだ。

「ふう〜…終わりか?」

「そ、そんな…馬鹿な」

彼はシールド内で、口元の部分を外し煙草を吸っていた…勿論シ
ールドには傷一つ罅割れ一つも無い。

「スウ…ハア〜…それでは、ゴミ虫諸君さようならだ」

之から一方的な暴力が始まる。

害虫駆除（後書き）

萃香だよ！！

んやっぱり才能の欠片も無いよ！
とりあえず話のお浚いだよ！！

・マッドが上手く書けてない

・主人公はメシア

・煙草はマルボロ？

って感じだったけ？
とりあえずゆっくりだけど、応援してくれると嬉しいですよ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481w/>

魔法少女リリカルなのは～はじまりの龍～

2011年10月16日02時48分発行